

八ヶ岳(赤岳)登山記 岡本 昭男



赤岳(八ヶ岳の最高峰:2,899m)山頂付近に立っている。2年ぶりの登山(3.8.26)、友人T.Kさんが、私の希望を入れて、今回の登山を計画してくれた。

去年は、コロナ禍で断念して

いたが、今年は、まだコロナ禍ではあるが、思い切って、決行した。遙かに、御嶽山、南に穂高連峰、そして、見回してみると、北アルプス、中央アルプ



ス、その手前に南アルプス、鳳凰三山、なんと見事に、青い連峰群が一望できる、絶景なり。

霧の中の阿弥陀岳



八ヶ岳登山案内板:登山開始
右手南沢コース 左手北沢コース

かで、山に抱かれている気分。

朝方は薄いガスがかかり、赤岳、阿弥陀岳、大同心稜(ロッククライマーのあこがれの岩山)は、いずれも霧の中だったが、今は、晴れや



阿弥陀岳の向こうに佐久方面が望める

ちなみに、八ヶ岳の八峰は、編笠山(2524m)、西岳(2365m)、権現岳(2718m)、赤岳(2899m)、阿弥陀岳(2806m)、横岳(2836)、硫黄岳(2742)、天狗岳(2445m)ではなかろうか。

昨夜は、行者小屋に一泊した。美濃戸口から、南沢コース、



行者小屋、一泊、元気回復

25)した。体力回復が第一だ。

昨夕刻には、今日の様な、好天は、期待できなかった。夕食時には、山荘の食堂は、赤と大きなストーブに火が入っているので、暖かった。しかし、就寝時(消灯:20:00)は、少し寒く感じた。



何度か、小屋の外に出て夜空を見上げたが、星一つ見えず、明日の登山が気にかかった。

ロッククライマーの憧れ、大同心、小同心

しかし、今日は、快晴、気分爽快、雲海も流れ、山々も生き生きとしている。

ストックを縮小し、リックにしまふ、最後の難所、鎖場を登る、両手で鎖を手繰りながら登る、少し恐怖感を感じる、鉄の梯子(二か所)を登ると、岩場になる、四つん這いで、岩を掴みながら登頂、山頂にたどり着いた。



泉界尾根、赤岳方面への道標、かなり登ってきた

山頂の標、お賽銭箱もある。気が付くと、ぽっかりと富士山が覗いている。風、流れる雲海には、山の厳しさが、一杯!先ほどの恐怖感と必死な動きをも取り去る。見下ろ



赤岳山頂の「弥栄」の塔



青く広い平野部がとても綺麗!

すと、赤岳頂上山荘が赤い屋根を光らせている。遠くに白樺湖が見える。赤岳鉱泉迄下山、味噌ラーメン(800円)を食べる。



山頂から見る山荘、営みのオーラがある

今回は、北沢のコース、樹林帯で、広がっている青苔がとても綺麗、虫達の声、柳川のせせらぎの音が、心を和ませる。これも、山の魅力の一つだろう、山の事故は、下山中がほとんどだと言われている。案の定、足を滑らせ転んだ、油断大敵なり。早朝、05:30に朝食を終え、06:00赤岳登山開始から、登山口、美濃戸口へ15:30到着、なんと約9時間30分間かけて、無事下山した。肉体は苦痛と安堵感が交差しているが、膝は、力が出ない、笑っている。

たくさん山の山ガール達が登山をしている姿を見ると、昔の山岳男、荒行的な行者的精神から、今や、大いに自然を楽しみ、自己



青い苔の絨毯 (ハヶ岳の有名なひとつの場所)

たかさんの山ガール達が登山をしている姿を見ると、昔の山岳男、荒行的な行者的精神から、今や、大いに自然を楽しみ、自己



高山の赤い花(低木:名前分らず)

見ている様な気分になった。自然から教わり、学ぶことは、なんと大きく素晴らしいことか！



清楚な「チシマギキョウ」 紫が目に染みる

山小屋のラーメン、大きなチャーシュー入りで、なかなかの味、美味しい。

飲料水を補充し、小休止。引き続き、下山を開始した、美濃戸口へ向け、下山する、

最上川下り 山路 永司

7月下旬に山形県大蔵村に仕事で行った。地図を見たら、最上川がすぐ近くを流れている。幸い仕事が早く終わりそうだったので、2日目の午後、観光最上川下りに行ってみたい。

貸切は別として、1人でも行ける定期観光船は、2箇所である。総延長 229km の大体真ん中あたりで営業している「最上川三難所船下り」@村山市と、ずーっと下流の「最上峡芭蕉ライン観光」「最上川舟下り義経ロマン観光」@戸沢村である。



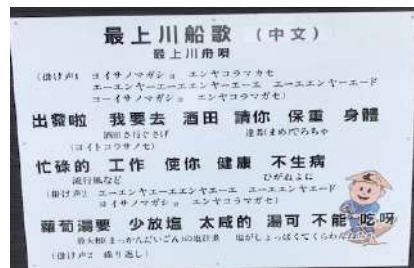
場所と時間を考慮して「芭蕉ライン」と決め、乗り込む。料金は 2500 円、約一時間の船旅だ。細長い舟で真ん中に 6 人用テーブルが縦に 5 つ、大体 4 人ずつくらい座り、総勢 20 余人。舟を操る船頭さんが船尾に、ガイド役が船先に。

「五月雨を集めて早し最上川 芭蕉」ではあるが、ちょうど行った時期は水量が少なく、流れも遅い。結果、かなりの時間はエンジンが動いていた。中盤からやっとな急流の雰囲気となるも、そこを過ぎるとまた速度は落ち、エンジン音が戻る。

さて「最上川舟唄」。我々が歌うのは、「酒田さ行くさげ 達者でるチャ」「流行風邪など引がねよに」までだが、これに続いて「股ん大根の塩汁煮塩がしよっぱくて くらわんねえチャ」とチケットに書いてある。そしてガイドさんが歌う。ガイドさんの説明では、「股ん大根(マツカンダイコン)とは二股のくず大根。これを舟の上で料理するのだが、男所帯、塩を入れすぎて、とても食べたもんじゃねえ。早く家族の元に返りたいなあ、というラブソング」とのこと。出発地によるが、酒田に行くと 30-40 日



は帰れなかったらしい。だからこそ「達者でるチャ」が大げさではない表現なのだ。客は日本人だけだったが、サービスで、英語バージョンと中国語バージョンも歌う。ただし、タモリ風で怪しげな内容だった。それが面白いのだが。



おしんのロケ地は、このルートにはなかったようで、何の紹介もなかった。残念。いつか冬の寒い日、両岸に雪が積もる中、炬燵船でちびりちびりやりながら乗船したい。